

## 保育教材としての人形劇の普及方法

—岐阜市保育協会研修会の参加保育士を対象にした調査から—

熊 田 武 司

## Using Puppet Show's as Childcare Teaching Material

—An Investigation of a Gifu City Nursery Teacher's Workshop—

Takeshi KUMADA

### Summary

In this study, I gave a questionnaire to persons who look part in a puppet play workshop. According to the results of this questionnaire, it is clear that training nursery teachers to perform puppet play is very important.

In addition to this, it is clear that most younger nursery teachers have theoretical knowledge about puppet plays from their training at college, but they do not have practical experience in performing puppet plays.

Therefore, nursery teacher training school include not only the theory, but also hands-on experience in puppet play practice production.

I would like to continue to study the integration of theory and the practical activities.

**Key word** : A puppet play, Training of the puppet play, Childcare teaching materials

### I はじめに

「保育士における人形劇の実践について (I)」<sup>1)</sup> (熊田, 2009) において、岐阜市内の保育所で人形劇の実践として行われているストーリーのある人形劇および人形を使っての対話の実践状況を明らかにした。その結果、ストーリーのある人形劇および人形を使っての対話の実践は、いずれも非常に少ないことが明らかになった。その原因としては、練習時間が確保できないことや人形劇をするための仲間が確保されないこと、人形を所有していないことなどが考えられる。

また、「保育士における人形劇の実践について (II)」<sup>2)</sup> (熊田, 2010) において、保育士は人形劇を保育教材としてどのように捉えているのか、なぜ人形劇を実践することができないのかなど、人形劇等の実践に対する保育士の意識調査を行った。その結果、ストーリーのある人形劇および人形を使っての対話のいずれも、保育士は保育の中で必要であるということ認識していることが明らかになった。そして、練習する時間を確保できない、演じる場所・機会がない、人形を所有していない、人形劇の演じ方を知らないなどの理由で人形劇が実践されていないことが明らかになったのである。

そこで、本研究においては、人形劇の実践に必要なと考えられる人形劇の研修を実際に開催し、

そこに参加した保育士に対してアンケート調査を実施する。そして、その研修が人形劇を実践する上で有益なものであるかどうかを考察するとともに、人形劇の普及方法について一考するものである。

## II 調査方法

### 1 対象

平成20年1月19日に岐阜市保育協会研修会の主催で『心豊かな表現活動～保育の中での人形の生かし方～』という演題で岐阜市内の保育士を対象とした研修会を開催した。この研修会に参加した岐阜市内の認可保育所（園）48園の278名の保育士を対象とする。

### 2 方法

岐阜市保育事業課の許可を得て、研修会の2ヶ月後に保育事業課から各保育所（園）長をとおして対象保育士に調査用紙を配布し、保育事業課をとおして回収した。

## III 研修内容

### 1 人形劇の上演を見る

人形劇団「ござる」による「しょじょ寺のためきばやし」を上演した。

人形劇団「ござる」は、結成16年になるアマチュア人形劇団でメンバーは7名であり、筆者を除く6名は保育士である。今回上演した人形劇の人形は、頭が手作りのお面で製作しており、身体は座布団を利用したものである。（図1）

身近にある材料で、人形が製作でき、簡易な人形であっても様々な表現が出来ることを参加者に理解してもらうために、この作品を選んで上演をしたのである。



図1 しょじょ寺のためきばやし人形

### 2 棒遣い人形について理解を深める

#### (1) 棒人形を使うことの大切さについて

人間は様々な道具を使って、様々な仕事をする。この道具の中で一番基本になる使い方は、柄（金槌、のこぎり、包丁など）を手で握ることである。つまり、道具を使う基本は、棒を握ることである。人間は成長し、道具の扱い方が上手くなるにしたがって、棒をしっかり握るだけでなく、運動を程良く調節し、自由に動かすことができるようになるのである。

棒人形を持って動かすことは、小さな子どもたちにとって最も適したものであるだけでなく、誰にとっても容易であり、同時に基礎的運動の訓練にもなる。一本の棒の端を持って、その棒を自由に動かすことができれば、どんな道具も人形も上手く扱うことができるのである。

## (2) 棒で動かすことの注意点

棒は人間が使う道具の中で一番古くから、いつも身近にあったものである。一本の棒を使って、穴を掘る、物をたたく、突く、物を引き寄せるなどができる。どの場合でも、棒の一方を持って、他の一方の先端をどう上手く使うかということが大切なのである。例えば、金槌、鍬、杵などの道具や日常使用している箸は、先端に力が上手く伝わるようにする事が道具を上手く使うということになるのである。

人形を棒で動かすというのは、棒の先の方をどの様に上手く動かせるかにかかっているのである。つまり、「元を持って、先を上手に動かす」ことが、棒人形を使うコツなのである。そこで一番大切なことは、棒をきつく握ってはならないことである。例えば、小さな子どもがクレヨンや鉛筆などをきつく握り過ぎて折ってしまったり、金槌でくぎを打つのに力が入りすぎると上手く打てなかったりする。

人形の操作棒は、ゆるく握るように持ち、なるべく指先を使って動かし、肩から肘、手首や指に無駄な力を入れないことが大切なのである。

## 3 棒遣い人形を製作する

簡単に製作でき、操作も簡単で、楽しい表現をすることができる2本棒の棒遣い人形である「しゃくとり虫人形」(図2)の製作を行った。

- (1) 材料・道具：スポンジ(胴体用、頭用)、竹箸(2本)、ビーズ、目玉、はさみ、カッターナイフ、赤油性ペン、速乾性接着剤

### (2) 製作方法

- ①はさみを使って、胴体用スポンジを円筒形にする。胴が太いと人形の操作が難しくなるため、直径は約25～30ミリとする。
- ②円筒の片端を曲面にして、しっぽを作る。
- ③はさみを使って、頭用スポンジを直径40ミリ程度の球体にする。
- ④頭と胴体を接着する。
- ⑤頭の下部としっぽの先から15ミリ程度のところに竹箸を刺し、接着剤で固定する。
- ⑥顔を決め、下から1/3くらいのところにカッターナイフで切り込みを入れ、口を開ける。
- ⑦口の内側を赤の油性ペンで塗る。
- ⑧顔に目玉とビーズを接着剤で貼り、目と鼻を作る。
- ⑨頭、胴体に装飾する。
- ⑩竹箸を黒く塗り操作棒にする。



図2 しゃくとり虫人形

## 4 棒遣い人形を使った表現について理解する

### (1) 人形が出たり入ったりの動き

人形が見えたり隠れたりするだけで、子どもたちの興味を引くことができる。人形が舞台から出たり入ったりする動きは、人形劇の人形の動きの中で最も大切であり、最も基本になる動きである。つまり、人形劇は、舞台に人形が現れることで始まり、人形が舞台からいなくなることで終わるのである。出たり入ったりとは、どんな舞台であってもそこに人形劇の世界が現れ、世界

が消えることを意味するのである。

人形を出したり、引っ込めたりするとき、この場面ではどのように出すのがよいか、この時はどのような引っ込み方をすればよいかを考え工夫することが、人形の演技の中で最も大切なことの一つである。

人形が現れた瞬間は、見る人に深い印象を与える。したがって、「人形を出す」ということを大切にする必要がある。人形浄瑠璃芝居では、演技の大切な心得として芝居は「出が八分」といわれている。人形が出たときにどんな姿勢で止まるかを思い浮かべて、そのようなかっこうに人形が現れるように出すことが大切なのである。

人形を引っ込めるときには、人形がどのように視野から消えるかによって、見ている人にはちょうど余韻と同じような想像的映像が残るのである。

## (2) 見る動き・止まる動き

人形の目を、見る物の方向に正確に定める。つまり、人形の目線を正しくして人形を操作することが、人形の演技の基本となる大切なことの一つである。そして、人形の目が対象物を見る見方によって、物を見たときの心の状態が現れるのである。それをいかに表現するかが、演技をする面白さである。芝居の面白さは、ストーリーの面白さだけではなく、ストーリーが展開されていく演技の面白さにあるのである。

人形同士が対話する場合に一番大切なことは、話す相手を見ることである。人形が互いに対話を交えることが人形劇を創っていくことの土台であり、相手に対するリアクションが、人形に命を与える人形劇の演技では特に大切なことである。さらに、動きの間（動きを止める）を作ること、観ている人の期待感が膨らむのである。例えば、サーカスに出演している犬は、人形ではないが言葉を話さず、演出されて止まる動きをすることで笑いが起き、見ている人たちは「今、～していた」「この後どうするのかな」などの内言を持つことになるのである。

## 5 台詞のない人形劇を即興で演じる

製作した人形を利用した即興人形劇を行うために、台詞のない人形劇の紹介し、実演をした後、参加者の代表者に即興の人形劇を演じてもらった。

- a) 音楽に合わせ、音楽のリズムに乗せて人形を踊らせる。
- b) 歌のない音楽をBGMにして、人形の動きによるストーリーを考え演技する。

台詞のない人形劇（ボードビル）の場合は、人形の目線・動きだけを使って何を表現したいのかを、観ている人にいかに想像させることができるか、理解させることができるかが大切なのである。そのためには、前述のような動きに注意をして、人形を操作することが大切である。

人形を2体以上登場させる場合は、それぞれの性格を決めてストーリーを作り、その性格に合わせた人形の動きが必要になる。2体以上の人形を踊らせる場合は、同じ動きと違う動きを取り入れることにより、演技にメリハリをつけることができるのである。

## IV 研修後の人形使用状況の調査結果

### 1 対象者の属性について

前述の研修を開催した約2ヵ月後に、研修参加者を対象にアンケート調査を行った。調査対象者278人に対して、有効回答数は223人（有効回収率80.2%）であった。

対象者の勤続年数（図3）は、1年は5.8%（13人）、2年は9.0%（20人）、3年は10.8%（24人）、4年～10年は22.9%（51人）、11年～20年は14.8%（33人）、21年～30年は19.3%（43人）、31年以上は17.5%（39人）であった。

分類項目に1年・2年・3年を単独で設けたのは、勤続若年者の人形使用状況を調査するためである。

研修参加者においては、勤続10年以下の保育士が48.5%で、全体の約半数を占めていた。公立保育所と私立保育園とでは、参加者数が異なり勤務年数の割合が異なると思われるが、本論には直接関係しないため、今回は全体の割合のみにとどめるものとする。

対象者の担当クラス（図4）は、所長・園長は3.6%（8人）、0歳児は8.1%（18人）、1歳児は17.5%（39人）、2歳児は18.4%（41人）、3歳児は14.8%（33人）、4歳児は9.9%（22人）、5歳児は12.1%（27人）、フリー（担当クラスを持たない保育士）は15.7%（35人）であった。

研修参加者においては、3歳以上児クラスの担当者が36.8%であるのに対し、3歳未満児クラスの担当者が44.0%と全体のほぼ半数を占めていた。

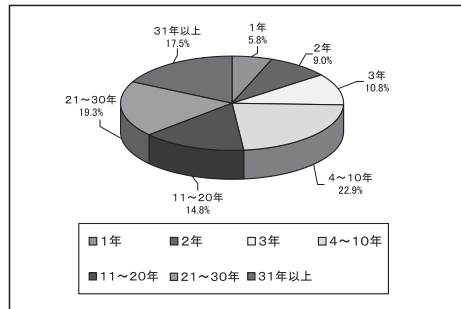


図3 研修参加者の勤続年数

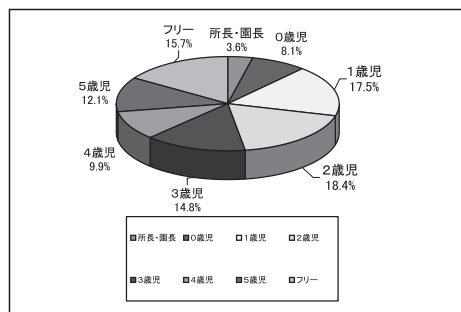


図4 研修参加者の担当クラス

## 2 研修後の人形使用状況について

### (1) 研修後の人形使用状況（図5）

「研修で製作した人形を、保育の中で使用したかどうか」という問いに対して、使用したと回答したのは60.1%（134人）、使用していないと回答したのは39.9%（89人）であった。

### (2) 人形を使用していない理由

人形を使用していない理由を、調査項目A～Jで調査した。

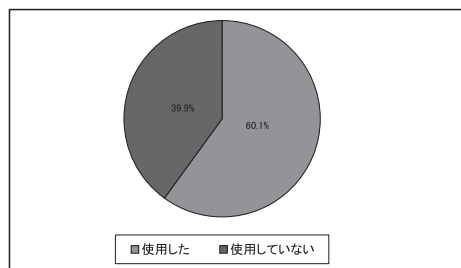


図5 研修後の人形使用状況

表1 人形を使用していない理由の調査項目

- A. 人形を使用する時間がない。
- B. 人形劇を練習する時間がない。
- C. 人形劇をする協力者がいない。
- D. 人形劇をする場所がない。
- E. 保育士が人形に興味がない。
- F. 子どもが人形に興味がない。
- G. 保育に人形劇は必要ない。
- H. 人形を紛失して、手元に人形がない。
- I. 今後使用する予定である。（ 月頃）
- J. その他

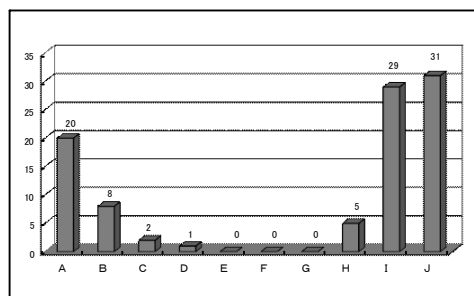


図6 使用していない理由（複数回答可）（A～Jは表1）

使用していない理由（図6）で最も多かったのは、項目I 29人であった。今後の予定については、4月が最も多く、新年度に新しいクラスで演じたいということであった。次に多かったのは項目A 20人であり、使用していない理由はこの2点に絞られた結果となった。項目Jの内容としては、人形が未完成である、人形が壊れたといった項目Hに類似する内容が多く、機会がないといった項目Aに類似するものも見られた。

項目E、項目F、項目Gを使用していない理由としてあげた保育士はいなかった。

（4）勤続年数と人形を使用していない理由（図7）

絶対数が少ないため適正な値ではないが、勤続1年目の保育士は30.0%、2年目は37.5%、3年目は27.3%が項目A；使用する時間がなかったと回答している。また、4～10年の保育士の41.7%が項目I；今後使用する予定であると回答している。

（5）担当クラスと人形を使用していない理由（図8）

1歳児担当保育士の25.0%、5歳児担当の33.3%が項目Aを理由としている。項目Iを理由として回答した保育士は、1歳児担当を除けばそれぞれ約30.0%であり、ほとんど差異がない。

### 3 日常保育における少人数を対象とした人形の使用について

（1）全体の使用回数（図9）

少人数を対象に人形を使用した保育士は、108人であった。1回使用した保育士は28.7%（31人）であり、2回3回と徐々に減ってはいるものの、5回以上使用した保育士も15.7%（17人）存在するという結果であった。

（2）勤続年数と使用回数

勤続年数と少人数での使用（図10）から、最も多く使用している年代は、21～30年の23人であり、次に4～10年の22人であるという結果であった。また、勤続2年の保育士においては、使用した人数の35.7%が5回以上使用しているという結果であった。

調査対象者の勤続年数別人数（図3）と比較すると、1年目の保育士は38.5%、2年は70.0%、

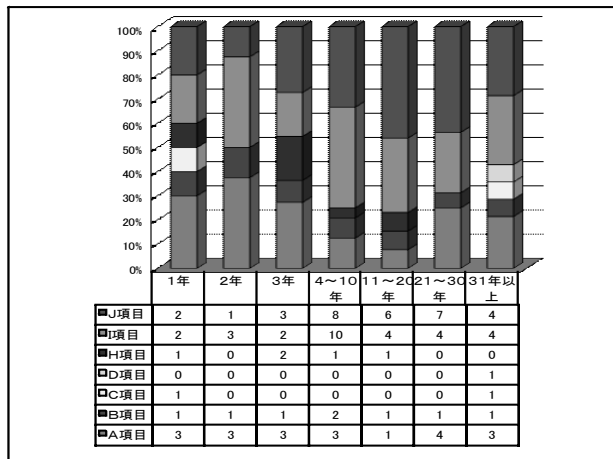


図7 勤続年数と使用してない理由（A～Jは表1）

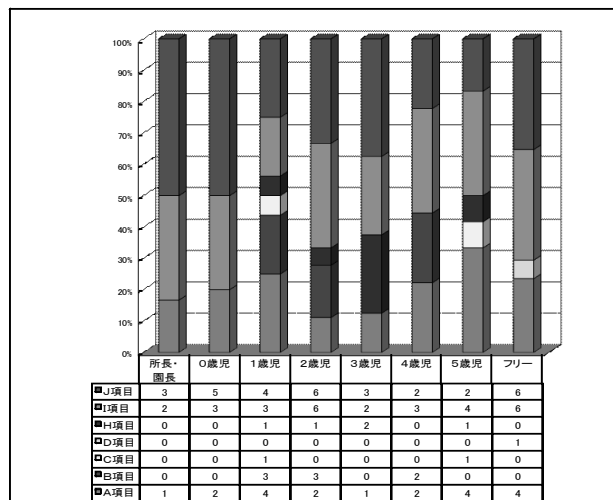


図8 担当クラスと使用してない理由（A～Jは表1）



3年は50.0%、4～10年は43.1%、11～20年は48.5%、21～30年は53.5%、31年以上は48.7%が人形を使用しているという結果であった。これにより、1年目を除くどの年代においても、研修に参加した保育士のほぼ半数が、研修後に少人数を対象に人形を使用していることがわかる。

(3) 担当クラスと使用回数

担当クラスと少人数での使用(図11)から、1歳児、2歳児、3歳児クラス担当の保育士が20人以上使用しているという結果であった。

調査対象者の担当クラス別人数(図4)と比較すると、所長・園長は25.0%、0歳児担当保育士は55.6%、1歳児担当は51.3%、2歳児担当は48.8%、3歳児担当は63.6%、4歳児担当は54.5%、5歳児担当は51.9%、フリーの保育士は37.1%が人形を使用しているという結果であった。これにより、所長・園長、フリーを除く各クラス担当保育士のほぼ半数が、研修後に少人数を対象にして人形を使用していることがわかる。

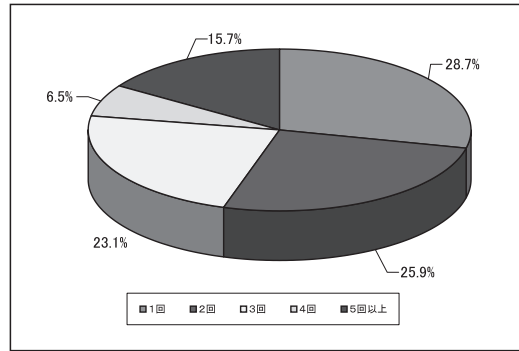


図9 少人数対象の使用回数

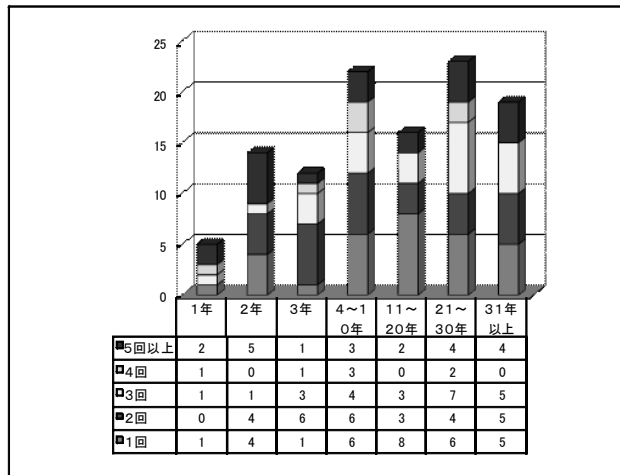


図10 勤続年数と少人数対象での使用

4 日常保育におけるクラス全体を対象とした人形の使用について

(1) 全体の使用回数(図12)

クラス全体を対象に人形を使用した保育士は、73人であった。1回使用した保育士は46.6%(34人)であり、2回3回と徐々に減ってはいるものの、5回以上使用した保育士も19.2%(14人)存在するという結果であった。

(2) 勤続年数と使用回数

勤続年数とクラス全体を対象とした使用回数(図13)から、最も多く使用している年代は、21～30年の21人であり、次に4～10年の17人であるという結果であった。また、勤続11～20年の保育士においては、使用した人数の36.4%が5回以上使用しているという

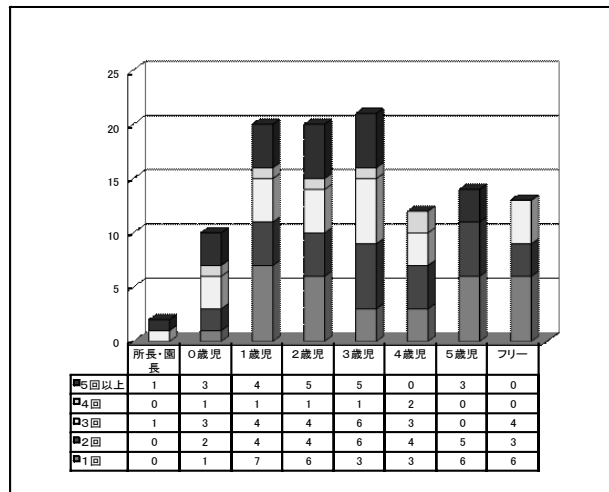


図11 担当クラスと少人数対象での使用

結果であった。

調査対象者の勤続年数別人数(図3)と比較すると、1年目の保育士は15.4%、2年は45.0%、3年は37.5%、4~10年は27.5%、11~20年は33.3%、21~30年は41.9%、31年以上は25.6%がクラス全体を対象に人形を使用しているという結果であった。

### (3) 担当クラスと使用回数

担当クラスとクラス全体を対象とした人形の使用回数(図14)から、2歳児担当の保育士の使用が最も多く、20人であるという結果であった。さらに、その30.0%が5回以上使用しているという結果であった。

調査対象者の担当クラス別人数(図4)と比較すると、所長・園長は25.0%、0歳児担当は16.7%、1歳児担当は38.5%、2歳児担当は48.8%、3歳児担当は48.5%、4歳児担当は27.3%、5歳児担当は22.2%、フリーの保育士は14.3%が人形を使用しているという結果であった。

## 5 行事における人形の使用について

### (1) 全体の使用回数(図15)

行事において人形を使用した保育士は、46人であった。そのうち、91.0%にあたる42人が使用回数1回であり、5回以上使用した保育士は1人であるという結果であった。

### (2) 勤続年数と使用回数

勤続年数と行事での使用状況(図16)から、最も多く使用している年代は、11~20年の12人であり、次に21~30年の11人であるという結果であった。

調査対象者の勤続年数別人数(図

3)と比較すると、1年目の保育士は15.4%、2年は15.0%、3年は8.3%、4~10年は13.7%、

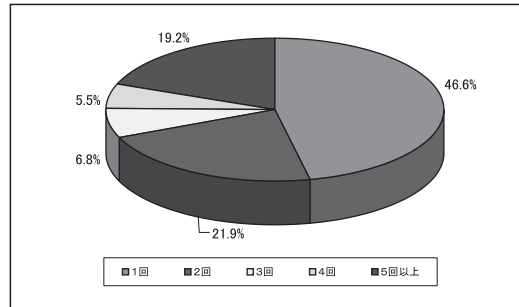


図12 クラス全体対象の使用回数

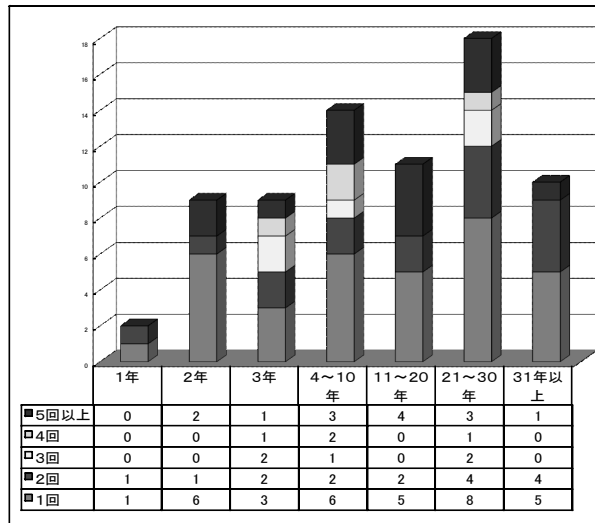


図13 勤続年数とクラス全体を対象とした使用回数

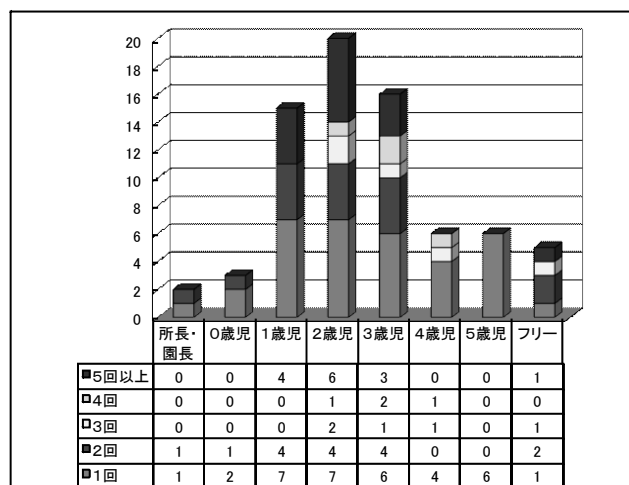


図14 担当クラスとクラス全体を対象とした使用回数



11～20年は36.4%、21～30年は25.6%、31年以上は23.1%が行事において人形を使用しているという結果であった。

(3) 担当クラスと使用回数

担当クラスと行事での使用状況(図17)から、2歳児担当の保育士の使用が最も多く、13人であるという結果であった。

調査対象者の担当クラス別人数(図4)と比較すると、所長・園長は25.0%、0歳児担当は5.6%、1歳児担当は20.5%、2歳児担当は31.7%、3歳児担当は12.1%、4歳児担当は22.7%、5歳児担当は25.9%、フリーの保育士は17.4%が人形を使用しているという結果であった。

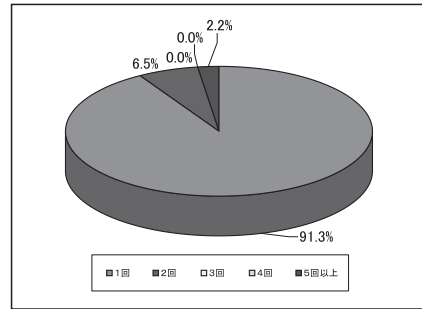


図15 行事における使用回数

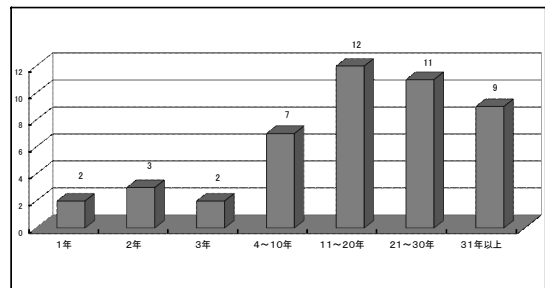


図16 勤続年数と行事での使用状況

6 研修の成果について

(1) 人形を使う(人形劇をする)きっかけ(図18)

今回の研修が「人形を使う、人形劇をするきっかけになりましたか」という問に対して、65.0%(145人)がきっかけになった、5.8%(13人)がきっかけにはならなかった、16.6%(37人)が以前から人形劇をしている、12.6%(28人)が無回答という結果であった。

①きっかけになった理由

- ・ 演技方など基本的な勉強が出来た。
- ・ 自分で作ったことが嬉しく、人形を使う意欲がでた。
- ・ 子どもが興味を持てる人形であり、嬉しそうな子どもの姿を見たい。
- ・ 人形劇の楽しさを実感でき、感動的だった。
- ・ 大人が見ても引きつけられるものであり、子どもにいろいろ伝えることが出来る。
- ・ 人形劇は大変だというイメージがあったが、手軽に扱える人形だった。
- ・ 子どもにとって魅力的な動きが出来る人形である。
- ・ 親しみやすい人形で、今以上に人形劇を保育に用いようと思った。

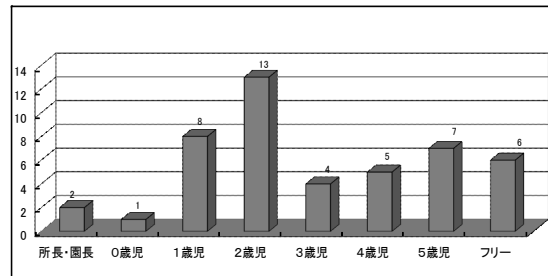


図17 担当クラスと行事での使用状況

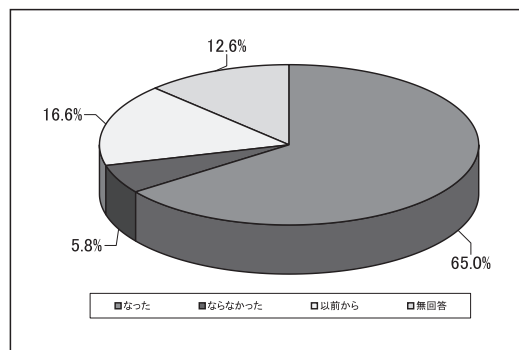


図18 人形劇をするきっかけ

## ②きっかけにならなかった理由

- ・仕事量が多く人形を使って子どもに話す機会がない。
- ・エプロンシアターやパネルシアターをよく利用している。
- ・人形より手軽な絵本や紙芝居を使っている。
- ・具体的にどのように取り入れてよいかわからない。

## ③以前から人形劇をしている理由

- ・子どもが集中して話を聞くことができる。
- ・人形は子ども達が心を動かされ、興味を深めることが出来る。

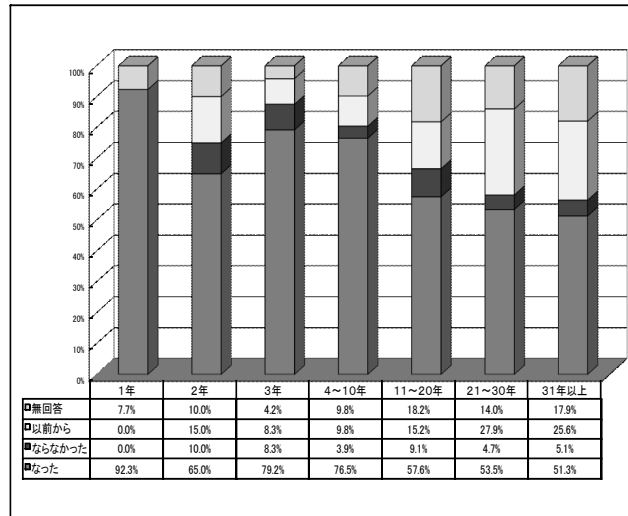


図19 勤続年数と研修の成果

## (2) 勤続年数と研修の成果

勤続年数と研修の成果(図19)から、きっかけになった、以前から人形劇をしているを含めると勤続10年以下の保育士では80.0%以上が人形劇を行うための成果があったと回答している。勤続1年以上の保育士においては、50.0%以上が人形劇を行うきっかけとなったという結果であった。

勤続年数別にみると、1年目の保育士は92.3%(12人)、2年は65.0%(13人)、3年は79.2%(19人)、4~10年は76.5%(39人)、11~20年は57.6%(19人)、21~30年は53.5%(23人)、31年以上は51.3%(20人)が、研修は人形劇をするきっかけになったという結果であった。

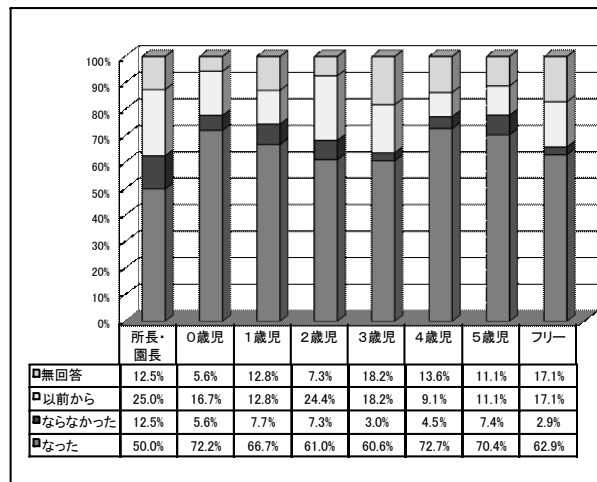


図20 担当クラスと研修の成果

## (3) 担当クラスと研修の成果

担当クラスと研修の成果(図20)から、所長・園長を除き、すべてのクラス担当の保育士の60.0%以上が、研修は人形劇をするきっかけになったと回答している。

担当クラス別にみると、所長・園長は50.0%(4人)、0歳児担当の保育士は72.2%(13人)、1歳児担当は66.7%(26人)、2歳児担当は61.0%(25人)、3歳児担当は60.6%(20人)、4歳児担当は72.7%(16人)、5歳児担当は70.4%(19人)、フリーの保育士は62.9%(22人)が研修は人形劇を行うきっかけになったという結果であった。

## V 研修後の人形使用状況の分析と考察

研修を行うことで参加した保育士の60.1%が保育の中で人形を使用したということは、研修のテーマであった「保育の中での人形の生かし方」は達成されたと考えられる。さらに、製作した人形を短期間に何度も使用したという調査結果については、簡単に操作ができ、様々な動きなどの表現ができるという人形の特性が関係していると思われる。人形を使用していない39.9%の保育士についても、その理由の多くが、時間がなかった、今後使用する予定であるということであり、使用できなかったのは年度末という时期的なものに起因していると考えられる。また、「保育士における人形劇の実践について（I）」<sup>1)</sup>（熊田，2009）で明らかになったように、保育所において人形劇が実践されることは非常に少ないが、使用していない理由に「保育士が人形に興味がない」「子どもが人形に興味がない」「保育に人形劇は必要ない」が含まれていないことから、保育士の興味や子どもの興味によって人形劇が実践されていないわけではないことが明らかになった。

今回の研修で製作した人形は、操作も容易であり、表情豊かに様々な表現ができるものである。これは、演じた時の子どもの反応として多くの保育士から回答があった「子どもが集中して喜んで観ていた」「人形の動きの面白さを楽しんでいた」「子どもの表情が生き生きとしていた」「人形に興味を示し言葉をかけたり、実際に動かして遊んだりした」などの調査結果からも明らかである。

人形を使用した場面を基準に行った調査では、人形を使用した134人のうち、少人数を対象に使用したのは80.6%（108人）、クラス全体を対象に使用したのは54.5%（73人）、行事において使用したのは34.3%（46人）であることから、約2ヵ月という短期間に、研修に参加した多くの保育士が人形を使用していることが明らかになった。さらに、5回以上使用した保育士が、少人数対象では12.7%（17人）、クラス全体対象では10.4%（14人）、行事では0.7%（1人）存在することが明らかになった。また、クラス全体を対象に使用した場合には39.7%が練習をした、60.3%が練習していないと回答しており、行事において使用した場合には80.4%が練習をした、19.6%が練習をしていないと回答している。この調査結果から、練習時間を確保できないことがそれぞれの場面での使用回数が減っている一因であると考えられる。

勤続年数との関係は、少人数を対象とした使用、クラス全体を対象とした使用、行事での使用の順で使用した割合は減っているが、勤続年数別にみると参加した保育士の割合とほぼ比例していることが認められた。したがって、保育士が人形を使用するという点に関して、勤続年数別ではほとんど差異が無いということが明らかになった。担当クラスとの関係においても、少人数を対象とした使用、クラス全体を対象とした使用については、参加した保育士の割合とほぼ比例しており、ほとんど差異がないことが明らかになった。しかし、行事での使用については、この期間、行事での使用回数がほぼ1回であるため一概には言えないが、2歳児担当者の割合が31.7%であり、所属する保育所もすべて違うことから、この期間の行事を担当した2歳児担当者が多かったのではないかと推察される。

少人数対象で使用した勤続年数別人数と調査対象者の勤続年数別人数との比較では、勤続2年の保育士が70.0%であることから、人形に関心を示し保育の中での人形の生かし方について理解したものであると推察できる。また、1年目の保育士を除くどの年代においてもほぼ半数が人形を使用していることから、人形を製作する（人形を所有する）、人形劇の演じ方を学ぶという研

修を行うことにより、保育士は人形劇を実践することができるということが実証されたと考えられる。

## VI 保育教材としての人形劇の普及について

「保育士における人形劇の実践について(Ⅱ)」<sup>2)</sup>(熊田, 2010)において、人形劇が演じられない理由として「練習する時間を確保できない」「演じる場所・機会がない」「人形を所有していない」「人形劇の演じ方を知らない」が上位に挙げられた。また、どうしたら人形劇が演じられるかについては、「人形劇の演じ方を学ぶ」「練習する時間を確保する」「人形を所有する」が上位であった。

したがって、人形劇を普及させるためには、これらを克服する必要がある。

練習時間の確保については、保育士の業務が増加している中で難しいと思われるが、行事において使用した場合には80.4%が練習をしたという結果からもわかるように、演じる機会を設定することで、それが可能になると考えられる。機会を設定するためには、人形劇で子ども達を楽しませたいという気持ちはもちろんであるが、保育士自身が人形劇を演じる楽しさを知ること、経験することが大切である。人形劇は、自分の体を使って演じる演劇とは違い、人形という媒体をとおして表現するものである。したがって、冒頭にも述べたが、人形劇は誰でも演じることができるものであり、簡単に操作ができる人形も存在するのである。今回の研修で製作した人形もその一つである。人形劇を難しいものと考えず、簡単に組み立てるものから導入する。そして、演じる楽しさを体験することが、演じる機会を設定し練習時間を確保することにつながると考える。

## VII 今後の課題

本研究によって、「人形劇の演じ方を学ぶ」「人形を所有する」ということに関しては、保育士を対象にした研修会を開催することが必要であることが明らかになった。ただし、今回の研修会でも存在したが、研修会には参加したものの教材が完成しなかったため、未完成のままで放置しているものが数多くあるということをよく耳にする。したがって、研修会では、時間内に人形および人形劇を完成させることも大切である。

今回の調査結果によって、人形劇を演じられない、演じ方を知らないという保育士が若年層に多いことが明らかになった。これは、保育士養成校において人形劇の知識は得たものの、実践することがなかったためではないかと推察される。したがって、人形劇普及のためには、保育士養成校において知識を得るだけでなく、実際に人形の製作を行い、実践し、演じ方を体験した上で人形劇を理解することが大切であると考えられる。

したがって、保育士養成校において実際に人形を製作し、人形劇を実践・体験した場合の人形劇の理解について調査することが今後の課題である。

引用文献

- 1) 熊田武司：「保育士における人形劇の実践について（Ⅰ）－岐阜市内の保育所（園）に勤務する保育士を対象にした調査から－」、『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第41集、pp.87～99、2009
- 2) 熊田武司：「保育士における人形劇の実践について（Ⅱ）－岐阜市内の保育士を対象にした人形劇に対する意識調査から－」、『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第42集、pp.69～79、2010

参考文献

- 1) 久富陽子（編者）：「実習に行くまえに知っておきたい保育実技－児童文化財の魅力とその活用・展開－」、萌文書林、2002
- 2) 石垣恵美子・玉置哲淳（編著）：「幼児教育課程論入門」、建帛社、1993
- 3) 川尻泰司：「日本人形劇発達史・考」、晩成書房、1986
- 4) 日本演劇教育連盟（編集）：「新人形劇入門」、晩成書房、1994
- 5) 吉田博子・藤田佳子：「幼児教育における児童文化－実習保育所における児童文化の現状について－」、『淑徳短期大学研究紀要』第46号、pp.131～143、2007

添付資料

1) 研修会実施後の人形の使用状況に関する調査

|  |  |
|--|--|
| <p style="text-align: center;"><b>研修会実施後の人形の使用状況に関する調査</b></p> <p style="text-align: center;">岐阜聖徳学園大学短期大学部<br/>幼児教育学科 准教授 熊田武司</p> <p>日頃より、本学の教育・研究に対して、ご指導・ご協力を誠にありがとうございます。</p> <p>先日、岐阜市保育協会研修会における『心豊かな表現活動～保育の中での人形の生かし方～』にご参加いただきありがとうございました。研修会時には、「楽しかった・属生会で使いたい・子ども達と遊びたい」などの反応をいただきましたが、作成した人形が実際に保育の中で使用されているかどうか、調査をしようと考えました。</p> <p>そこで、岐阜市保育事業家の許可を得て、研修会に参加された保育士の皆様（個人）を対象に追跡調査を実施させていただくことにいたしました。</p> <p>つきましては、年度末のお忙しい時期とは存じますが、本調査にご協力をいただきますようお願い申し上げます。</p> <p>なお、本調査用紙は<b>3月17日（月）まで</b>に保育所（園）ごとに回収袋にまとめ、メール便にて保育事業室までご返送いただきますようお願いいたします。</p> <p><b>※調査に関するお問い合わせ 幼児教育学科 児童文化研究室 ☎058-278-**** 熊田武司</b><br/> <b>※各園間で調剤数のあるものについては、記号（A、B、…）に○を付けてください。</b><br/> <b>※（園）としてある園間については、複数園等も可とします。</b><br/> <b>※各項目内の番号（○◎◎）は、選択するものとして回答してください。</b></p> <p>01 保育士としての勤続年数は何年ですか。<br/> A. 1年 B. 2年 C. 3年 D. 4～10年<br/> E. 11～20年 F. 21～30年 G. 31年以上</p> <p>02 今年度の担当クラスは何歳児クラスですか。<br/> A. 所長・園長 B. 0歳児 C. 1歳児 D. 2歳児<br/> E. 3歳児 F. 4歳児 G. 5歳児 H. フリー</p> <p>03 人形の中で、作成した人形を使用しましたか。<br/> A. 使用した B. 使用していない<br/> ※Aと回答した方は、人形を使用した場面ごとの数値に答えてください。<br/> ※Bと回答した方は、2,3へ進んでください。</p> <p><b>場面1【日常保育の中で、個人又は少数人数の子どもの対象に使用した】</b></p> <p>04 この場面で何回使用しましたか。 _____回<br/> 05 何歳児を対象に使用しましたか。<br/> ① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____</p> | <p>06 人形をどのように使用しましたか。（アまたはイを記入してください）<br/> ア 保育士が人形を動かして見せた。 イ 子どもが人形を動かした。<br/> ① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____</p> <p>07 その時の子どもの反応はどうでしたか。<br/> _____ ② _____<br/> _____ ③ _____<br/> _____ ④ _____<br/> _____ ⑤ _____<br/> _____ ⑥ _____</p> <p><b>場面2【日常保育の中で、クラス全体又はそれ以上の子どもを対象に使用した】</b></p> <p>08 この場面で何回使用しましたか。 _____回<br/> 09 何歳児を対象に使用しましたか。（園）<br/> ① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____</p> <p>10 人形をどのように使用しましたか。（アまたはイを記入してください）<br/> ア 保育士が人形を動かして演じた。 イ 子どもが人形を動かして演じた。<br/> ① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____<br/> ⑦ _____ ⑧ _____ ⑨ _____ ⑩ _____ ⑪ _____ ⑫ _____</p> <p>11 人形は、何人で演じましたか。<br/> ① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____ ⑦ _____ ⑧ _____ ⑨ _____ ⑩ _____ ⑪ _____ ⑫ _____</p> <p>12 その時の子どもの反応はどうでしたか。<br/> _____ ② _____<br/> _____ ③ _____<br/> _____ ④ _____<br/> _____ ⑤ _____<br/> _____ ⑥ _____</p> <p>13 人形を演じるにあたって、練習はしましたか。<br/> A. 練習した B. 練習していない</p> <p>14 A. と回答した方は、どのくらい練習しましたか。 約 _____ 時間 _____ 分</p> <p><b>場面3【行事（誕生会、ひな祭り会など）において人形劇を演じた】</b></p> <p>15 この場面で何回使用しましたか。 _____回<br/> 16 何歳児を対象に使用しましたか。（園）<br/> ① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____</p> |
|--|--|

